UWC NEWS

No.52

2026 年６月
発行：公益社団法人 ユナイテッド・ワールド・カレッジ日本協会

本 2026 年度、日本協会から派遣するタイ校。プーケットの豊かな自然に囲まれた広大なキャンパスが魅力である。

◆ CONTENTS ◆

巻頭言 ---------- 3
2026 年度派遣生名簿 ---------- 4
2025 年卒業生の声 ---------- 5
2025 年度日本協会の活動 --------- 16
特別寄稿---------- 17
～ＵＷＣ卒業生便り～
鬼柳　修一 （カナダ校　1994 年卒）
藤田　真穂 （インド校　2013 年卒）
ＵＷＣ派遣生の推移、ＵＷＣ卒業生の進学先 ----------18
ＵＷＣ日本協会会員企業、最近の動向 ----------19

UWC／UWC日本協会について

ＵＷＣ（ユナイテッド・ワールド・カレッジ、本部：ロンドン）は、世界 150 カ国以上から選抜された高校生を受け入れ、教育を通じて国際感覚豊かな人材を養成することを目的とする国際的な民間教育機関です。現在までに、イギリス、カナダ、イタリア、アメリカ、香港、インド、ノルウェー、オランダ、ドイツ、中国、日本、タンザニア、タイ等、18 の国・地域にカレッジ（高校）が開校されています。

わが国でも、ＵＷＣプロジェクトの趣旨に賛同して、経団連の協力のもとに、1972 年９月に「ＵＷＣ国内委員会」が設立され、同委員会は、1975 年２月に社団法人格を取得して「社団法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ（ＵＷＣ)日本協会」に改組されました。2012 年４月１日には、公益社団法人に移行し、ＵＷＣのカレッジに派遣される派遣生の選考、奨学金の支給、ＵＷＣ事業の日本への紹介等の事業を行っています。

巻頭言

「当たり前」を問い直す経験

UWC日本協会会長（アサヒグループホールディングス会長）

小路　明善（こうじ　あきよし）

私はこれまで、企業において長く人材育成に携わってまいりました。その中で強く感じていることは、人が大きく成長するのは、自分にとっての「当たり前」を問い直す経験をしたときである、ということです。慣れ親しんだ環境や価値観の中にいると、それが唯一の正解であるかのように感じてしまいがちです。しかし、新しい環境に身を置き、異なる背景を持つ人々と出会うことで、自分の中の「当たり前」が必ずしも普遍ではないと気付かされます。その気付きこそが、人としての成長の第一歩であると感じています。

現在、世界は生成AIの急速な発展や国際情勢の変化など、かつてない速さで姿を変えています。そのような中、自分の考えや立場だけにとらわれることなく、異なる視点に耳を傾け、柔軟に物事を捉える力がますます重要になっています。

UWCは、まさにそうした「当たり前」を問い直す経験を高校生という吸収力のある時期から得られる場所です。世界各国から集まった仲間と生活を共にし、互いの違いに戸惑いながらも理解を深めていく日々は、教室での学びだけでは得ることのできない、かけがえのない経験となるでしょう。その経験は、知識や技能にとどまらず、自ら考え、他者と協働しながら課題に向き合う力を育ててくれるはずです。

自分の「当たり前」を問い直し、新しい視点を受け入れることは、決して容易ではありません。しかし、その積み重ねが、他者を尊重し、共に未来を築いていく力につながっていくのだと思います。そうした力を備えた若者が育っていくことが、持続可能で平和な社会の実現にもつながると信じています。

日本協会では、高校生にUWCでの貴重な学びの経験を積んでいただけるよう、多くの企業からのご支援を得て、奨学金を設けています。企業の皆様には、前途有望な生徒が少しでも多くUWCで学べるチャンスを掴めるよう、ご支援をいただきたく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

◆　UWC2026 年度派遣生名簿　◆

Pearson College UWC（カナダ校）

東　心咲	大阪府立天王寺高等学校

UWC Adriatic（イタリア校）

勝野　瑞紀	洛南高等学校
本間　香帆	女子学院高等学校

UWC-USA（アメリカ校）

宇野　伽乃音	福井県立高志高等学校

Li Po Chun UWC of Hong Kong（香港校）

萩原　杏奈	東京学芸大学附属 国際中等教育学校

UWC Red Cross Nordic（ノルウェー校）

浅田　真央	三田国際科学学園高等学校

UWC Mahindra College（インド校）

見須　融	大阪府立千里高等学校
山西 和花	香川県立高松高等学校

UWC Maastricht（オランダ校）

伊藤 華玲	渋谷教育学園幕張高等学校
奥村 心結	カリタス女子高等学校
孫 莉佳	日本女子大学附属高等学校

UWC Robert Bosch College（ドイツ校）

坂口　理久	筑波大学附属高等学校

UWC Changshu China（中国校）

髙橋　愛子	フェリス女学院高等学校

UWC ISAK Japan（日本校）

有薗　彩奈	浜松学芸高等学校

UWC East Africa（タンザニア校）

那須　万尚人	大分県立大分上野丘高等学校

UWC Thailand（タイ校）

福本　京平	筑波大学附属高等学校

＊個人情報につき、お取扱いには充分ご注意願います。

一次選考受験人数　（人）

	国立	公立	私立	計
男子	2	6	8	16
女子	3	11	30	44
計	5	17	38	60

二次選考受験人数　（人）

	国立	公立	私立	計
男子	2	5	4	11
女子	2	5	17	24
計	4	10	21	35

最終派遣人数　（人）

男子	4
女子	12
計	16

◆ 2025 年 卒業生(2023 年度生)の声 ◆

UWC Atlantic（イギリス校）

そのままでよかった、私のUWCでの日々

木村　智香

ハウスでのひと時

ＵＷＣは、世界中から選ばれてきた、個性や才能豊かな特別な人ばかりがいるところだと当初思っていた。日本の高校ではなるべく気配を消して生活していた私が、この環境に順応できるのか、授業や周りの話についていけるのか、劣等感と不安を感じながらイギリス校での生活が始まった。オリエンテーションでは、想像通り私は周りに圧倒された。自分と同じ高校生に見える人が、全く違う世界を生き、全く違う経験をし、全く違う価値観を持っている。

しかし、日常生活が始まってみると、周りにいる人の別の一面が見えてきた。Dorm Duties と呼ばれる部屋単位の掃除当番では、皿洗い、冷蔵庫の掃除、パンやチーズなどの食糧の運搬などを行うが、同室４人の中でサボる人もいれば、ある程度参加する人もいる。日本の高校での掃除当番とまるで同じ光景に、ある種の親近感を覚えた。

授業で発言が求められる際は、慣れるまでは苦戦したが、予習や事前準備などの工夫で、取り組み姿勢は日本と変わらず、努力は確実に評価されることがわかった。

ＵＷＣとは、特別な才能や経験を持った人だけが集まる場所ではなく、互いに思いやりを持ちながら自分が知らなかった世界を覗きながら日常生活を共にする唯一無二の学びの場ではないかと思う。私も少し自信がついた。

転々々々

西尾　地博

景勝地ニードルズにて

日本にいたころは恵まれていたとつくづく思う。給食で若狭牛のカレーくらいのものは普通の公立中学校では出なかっただろう。イギリス校で「カリフラワーのステーキ」や「フィッシュレスフィッシュアンドチップス」が献立表に書いてあった時は何のブリティッシュジョークだろうと思ったが、実際に出てきた。冗談じゃない。「何を食べたらそんなメニュー思いつくんだ」と言いたくなる気持ちを目の前の答えが諫める。

ＵＷＣの最たる特長として多様性が挙げられる事が多いが、私はほぼゼロの状態から急速に発展する文脈を経験できることがＵＷＣの最たる特長だと思う。

というのも、ＵＷＣの生徒は母国、言語、貧富、卒業後の進路でさえ多様であるため、例えば「大学どこ受けるの？」よりも「卒業したら何するの？」のほうが適切な質問だったりする。しかし、380 人が寮で生活することは、友達との内緒話が、瞬く間にコミュニティの常識になり得る事を意味する。起承転結でいう「転」。極めて早く構築される高い文脈がイギリス校特有の言葉として表層化したりする。常識が新たな常識を作り、ある時にはＵＷＣ生も大して多様じゃないなと思えるようになる。その時初めて自分のことをＵＷＣ生だと実感した。

慣れ

山内　琴絵

オリエンテーションの授業で、文化人類学の目的は“make the unfamiliar familiar”だと教えられた。今思えば、ＵＷＣでの２年間はその言葉を反芻し続ける長い実験のような期間だった。靴を履いたままどかっとベッドに座ってくる友人も、深夜にシャワー室から爆音で流れる音楽も、最初は私の内側に鋭い異物感を残したのに、いつの間にか日常に滲み込んでいった。日常で不意に胸を掠める不慣れさへの違和感を、その背後に広がる広範囲のコンテクストに目を向けることで、自分と相手の文化や社会的規範について考えるきっかけに変換していくことを学んだ。

親友アニーとの散歩帰り

自分を慣らすという行為は、世界を受け入れる柔らかさを与える一方で、気付かぬうちに自分自身の輪郭を摩耗させる。過剰な順応がいつか自分の軸を侵食し、何者でもなくなってしまうような不安が時折頭をよぎった。とはいえ、世界の全てを絶え間なく読み解こうとすれば、心はすぐに擦り切ってしまう。

だからどこかで「現実なんてこんなものだ」と一呼吸おいて受け流しつつ、拾い上げた違和感の細い棘を胸の中にしまい込んでおく。完全に馴致するでもなく、突き放しもしない。そうして適度な距離感で世界と向き合っている中で、遠かったはずの価値観が少し身近なものとして立ち上がってくる。

ＵＷＣでの２年間はまさに、見知らぬものが、ひそやかな時間を経て「親密な景色」へと変貌していく瞬間を、繰り返し目撃する旅だった。

Pearson College UWC（カナダ校）

「かえで」

寺田　朋笑

ルームメイトと

「か」身体を使った学び、「え」縁、「で」ディスカバリー。

カナダのシンボルである「かえで」にちなむこの３つの言葉が、カナダ校での生活を物語っていると思います。

カレッジ横の湾で生物観察や昆布の調査を行った海洋学の授業や、別れ際に「love you」と愛情を言語化する文化など、世界中から集まった仲間との生活は、授業や文化の違い、新たな価値観を発見する日々の連続でした。

授業の概念が覆されたり、場の流れに乗れなかったりと、日々の発見によって戸惑いや悩みも生まれましたが、ＵＷＣで出逢った人との縁が、これらを学びへと昇華してくれました。専門の学問に情熱的な先生方、知的で自身の国や文化を快く説明してくれた友人、常に相談にのってくれた寮母に恵まれたおかげで、実験や観察を通して学習する楽しさ、異文化理解の大切さ、新たな環境への適応方法などを学ぶことができました。また、これらは、実際に自分の身体と心を使って体験したからこそ得られた学びだと思います。

ＵＷＣでの学びと縁と発見。２年間の生活を終えた今、「かえで」は私の成長の象徴であり、かけがえのない財産です。このような貴重な機会をくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

水やり

小林　潤良々

友人と朝日

教育とは植物を育てるようなものだと、私に教えてくれた先生がいました。２年生になり様々な行事の運営に関わることが増えたものの、思い通りにいかないことも多くもどかしく感じていた心境を打ち明けた時のことです。

生徒達はまだ土に植わった種で、先生である自分にできるのは水をたっぷりあげることだけ。それはいつかの未来に綺麗な花を咲かせてほしいと願うからなのだと、彼女は軽やかに笑って言いました。

だとすれば、カナダ校でのあの２年間は、実に壮大な「水やり」だったと思います。その水とは、ＵＷＣ創設者の願いであり、先生方が可能にしてくれた数々の経験であり、両親の底知れぬ応援であり、友人と交わした言葉や共有した幸せの瞬間であり、そしてその他数え切れない方々から贈られた想いだったのでしょう。

その想いの一つひとつを本当にきちんと受け取れたのか、不安で仕方ない気持ちもあります。でもあるいは、それは数や量や割合の問題ではないのかもしれません。

あの場所にはたしかに人々の想いがあり、私はそれを感じることができた。そのことさえ覚えていれば、この２年間の思い出が、これからの私の人生でどのようにその意味を変えていこうとも、いつか綺麗な花を咲かせるための水になってくれるのだと思います。

UWC Adriatic（イタリア校）

「自分」

眞田 薫

チューターグループと卒業式にて

「自分に嘘をつかない。」
自分に真正面から向き合う。ＵＷＣ２年目の夏に 1 枚の紙切れに書いた、ひそかな決意だ。

自分が知る世界が簡単に崩れ落ちる日々で、気が付けば、「日本人」というアイデンティティ以外、揺るぎない「自分」などどこかに流されてしまいそうだった。

ＵＷＣでの 2 年間、私は、そんな流れに必死に逆らって、自分の軸を手に入れようともがき続けた。

そうしてもがいた先にあったのは、深夜の議論、愛する友人、ワクワクする挑戦、そして、尽きることない問いだった。もがくのも案外悪くない。完璧からは程遠いＵＷＣ生活は、美しく、苦しく、何と言っても、生きている実感を与えてくれた。

世界に焦点を当てるＵＷＣで、私は「自分」の大切さを知った。多様性を形作るのはそれぞれの「自分」。世界の誰かを思いやるのも「自分」。ＵＷＣ後の人生を決めるのも「自分」。自分に素直であり、それぞれの「自分」を尊重するからこそ、友人、ＵＷＣ、そして、世界と向き合うことができる。だから、自分に嘘をつかず、世界と真正面から向き合いながら、学び続けられる人でありたい。

あの夏、恥ずかしくて誰にも言わなかったひそかな決意を、私は今、「自分」の軸として、胸を張ってここに掲げる。

結局僕は何を学び、これからどう生きるのか

板垣　潤

チューターディナーにて

２年間の留学を終えて、「強く優しく生きる」が座右の銘リストに新しく追加された。

僕にいつなんどきでも、手を差し伸べてくれた友人たち、スタッフ、ホストファミリー、そして老人ホームのおばあちゃんたちから、他者を想う「優しさ」は誰かの幸せを生み出すということを改めて学んだ。そして、同時にその優しさに裏付けされるそれぞれの信念の「強さ」がないと、その優しさは表面上のものだけで終わってしまうという学びも深く心に刻まれた。

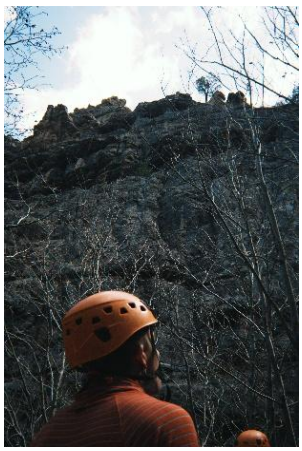
一方、イタリア校の日常生活では、ＵＷＣのモットー自体に疑問をもってしまうような、生徒たちの短略的で利己的だとも言える言動を見聞きしたこともよくあった。しかし、それもまた現実であり、僕が考える限り、それは現在の国際社会の様子を反映しているとも思う。だからこそ、僕がイタリア校での日常生活から学んだ「強く優しく」生きることの重要性は、現代国際社会においても普遍だと思ったのだ。「強い」信念は、混沌としている現代社会で人々を惹きつける力となり、他者を想う「優しさ」は、人類全体が幸せに共生することにつながる。

これから先、この学びをどのように活かし生きていくのか、あとは僕自身にかかっている。

UWC-USA　（アメリカ校）

いつか思い出を語れる日まで

湯浅　心


クライミング

ＵＷＣで得られる利益は多岐にわたる。多様性によって広がる視野、英語力など、堪えた以上のものを得た。その中で１つ紹介するのは、物事を自分ごととして考えていいということだ。

アメリカへ到着して数日、気が向いてクライミングレッスンに顔を出した。路地へ足を踏み入れるような好奇心に背中を押されてだった。いざ登ると楽しくなり、達成感と惰性から続けていたら、２年目にはクライミングリーダーとなっていた。その頃には、下で支えるビレイヤーとしてのスキルも身につけた。相手に合わせてロープを引き、体の重心を動かす。

そうして登り終わったらロープを送り、戻ってきたクライマーとハイタッチして称え合う、その折に交わされる言葉が登攀は２人で達成したものなのだと気づかせる。そのとき、自分で引いた境界線にふと思い至った。たとえ自身が登らずとも、ロープを握ることで背中を支えることはできるのだ。登らないからといって、登攀に無縁なわけではない。むしろ足元で相手の息づかいを感じるからこそ気づくものもあるのだろう。どれほど自分には関係ないと思っている事も、よく見れば細い糸で繋がっているのかもしれない。そう考えると、誰かの思いに自分の心を重ねることも、決して自分勝手ではないと思えた。

友人とパーティーにて

今思い出せることはこんな些細な経験ばかりだが、これが思い出されるたびに積み重なり、いつかはっきりした形で言語化できるようになるときが楽しみである。

愛の視点で見る世界

西村　咲良

部屋に飾った旗や写真を見るたび、ＵＷＣで出会ったかけがえのない友人たちを思い出す。私は２年間彼らの多様な視点を通して、世界には私の知るものとは全く異なる見え方があることを学んだ。

卒業式

ＵＷＣでの毎日は驚きの連続で、やはり世界は広く、人の数だけ意見があるということを実感する出来事が多くあった。同時に、どれ程異なる背景を持つ人とも共通点が見つかることも知った。誰もが美味しいご飯が大好きで、キッチンにはいつも誰かの母国料理を囲む笑顔が溢れていた。

私は、共通点が見えない人と分かり合う方法を探したいと願ってＵＷＣに入ったが、愛と忍耐、対話の意思があれば、必ず心が通じ合う瞬間が訪れると学んだ。

また、この２年間世界について新しい知識が増えるほど、自分についてもより深く知ることになるような不思議な感覚だった。

ウェルカムセレモニー

仲間たちと語り合う中で価値観や生き方の軸となる考えが少しずつ明確になっていった。

ＵＷＣで過ごした日々の本質は、時間や経験を共にし、喜びも困難も分かち合った仲間との繋がりにあった。

これからの人生、ＵＷＣの仲間達が私にそうであったように、出会う人々にとっての良き対話の相手であり、共に課題に向き合うパートナーであり、そして人を愛する心を体現する存在でありたいと思う。

Li Po Chun UWC of Hong Kong　（香港校）

「パワーデュオ」

守屋　花

MTR で出かける Tsehai と私

私と隣の部屋の親友 Tsehai はよく鍵を部屋に忘れる。そんな時、私は決まって Tsehai の部屋のドアを５回たたく。秘密の暗号。すぐに「花でしょ。」と顔を出す彼女。窓際の机をよじ登って外に出て、壁づたいに自分の部屋の窓まで移動して、そこから部屋に滑り込む。するとすぐノック５回。忘れてるよと靴を持ってきてくれた。２年間で何回繰り返したことだろう。

私と Tsehai は正反対だ。私は日本出身で、前髪があって、箸を使って、辛いものが大好き。

Tsehai はエチオピア人とオランダ人の両親を持つブリティッシュガール。

きれいなカールした髪、映画が好きで私が見る前にネタバレしてしまうほど、タピオカミルクティーが大好物。そんな私たちは Day 1 からのバディである。

なんで仲良しなんだろうと一度話したことがある。

「めちゃくちゃ違うのにね、でもだからじゃない？」と言われたとき、“多様性”という一言で片づけられてきたことが、初めて実感として胸に落ちた。

私たちはお互いがちがうから一緒にいて楽しいし、学び続けることができる。それほどシンプルなことなのだ。

卒業パーティーでの一枚

２年目の冬、Tsehai は前髪を作った。「花に染まっちゃったじゃない！」

誇らしげに見せてきた２本のカールは、大学１年目になった今でも健在だとか、そうでもないとか…。

最後になりますが、この２年間支えてくださったすべての方々、そして大好きな家族に、心から感謝を伝えたいです。多謝！

UWC Red Cross Nordic（ノルウェー校）

写真の中のオーロラ

遠山　青伽

写真の中のオーロラ

オーロラ。夜空のキャンバスを埋める光の絵の具。フォルダを遡ってその写真を見つけるのは容易い。特徴的なビビッドの紫や緑は一際目立つ。

だけど、ノルウェー校で見た実物は違った。ぼんやりしていて、曖昧で、写真ほど綺麗ではない。

学校を訪れたメディアが、イスラエル人とパレスチナ人に並んで歩くよう伝えカメラを構えたのを見かけ、違和感を覚えた。２人は殆ど喋らない。国の関係が悪いから不仲という訳ではない。違うグループに属していて、関わらないだけ。個人としてはありふれた関係の２人も、国同士のいざこざによって“仲良し”にされていた。

距離があれど、自然な関係。そんな普遍性こそ、ＵＷＣの真髄だと私は考える。私たちはどこまでも普通の、等身大の、若者だった。

只のティーンとして一緒に笑っている私達にだけは、政治も歴史も介入できなかった。それどころか、お互いの国についてジョークを言えるほどに仲良くなる。誇張無しに、「新しい未来を担って築いていくんだ！」と思えた。

２年間で触れた国籍は、約 100。これからの人生を通しても、この数を超えることはできないだろう。

ぼんやりしていて、曖昧で、写真ほど綺麗ではない。

これは、あの場所での体験そのものであり、自分の目で見たからこそ知ることができたことである。

大親友とベルゲンへ向かう船上にて

UWC Maastricht（オランダ校）

初めの一歩

須安　真菜

「なるようになる」

ＵＷＣに応募した時から卒業式の日まで、この言葉を何度口にしたか分からない。こう書くと、まるで２年間がつらいことばかりだったように聞こえるか

もしれないが、決してそうではない。私にとってこの言葉は、「なるようになるから、とりあえず一歩踏み出してみよう」という前向きな意味だ。

地方で育ち、「普通」を追っていた私にとって、「普通」が存在せず、何かに対して強い熱意を持つ同級生たちに囲まれた環境はとても新鮮だった。

友達と

そんな彼らと過ごし、自分に限界を作っているのは、いつも自分自身ということに気がついた。

ＵＷＣには、周囲の環境に言い訳をせず、やりたいことを突き詰めようとしている人がたくさんいる。そんな人たちに勇気をもらって、私も実際に日中青年会議の運営など、さまざまなことへ挑戦できた。

雪の日の寮

もし、これを読んでくれている地方の高校生がいたら、前例がないからなんて言わずに是非挑戦してほしいと思う。ＵＷＣの存在を知っているだけで幸運だし、２年間で得られる経験と能力は他では得られないと断言できる。

最後に、この場を借りて２年間を支えてくれたすべての人に感謝を伝えたい。誰か一人のサポートが欠けても、このような経験は決して得られなかった。皆さんの協力と応援のおかげで、挑戦することの大切さを学ぶことができた。

「またね」に込めた願い

坂口　くり果

親友たちとコルマールにて

卒業翌日。「またね」の一言が重く感じました。

その「また」がいつ来るかわからない。隣にいた人は数日後、爆撃の下で暮らし、連絡も途絶えるかもしれない。共に過ごした当たり前の２年間が、どれほどの奇跡だったかを痛感しました。

思えば、何気ない一言で相手の文化的価値観を踏み躙ってしまったこともありました。

ただ、謝罪の気持ちはあっても「理解する」ことと「受け入れる」ことの間には高い壁があって。当時の私は、自分の価値観を矯正することが異文化理解だと信じ、無意識に彼らとの間に線を引いていました。

けれど、肩を並べ眺めた窓一面の虹、半泣きで一緒に勉強した夜、寝ることも忘れ朝まで話に花を咲かせた日。

全く違う人生を歩んできた友人と日常を重ねるうちに、私は文化的価値観の違いを「違い」として身構えなくなりました。

小学生から夢見た世界は、当時辞書で調べた異文化理解の定義を超え、些細な日々の過程で生まれた相手を想う気持ちによって、彼らの価値観が自然と自分の中に溶け込む感覚を教えてくれました。

どれだけ重みを感じても、「さようなら」ではなく「またね」と言って、いつか「ただいま」と言う日が来ることを願えた。

そんな人たちと出会えた私は、世界一の幸せ者です。

ミュージカルのディレクターたちと

UWC Robert Bosch College（ドイツ校）

強さと弱さ

東山　佳樹

自分は強い人間だと思っていた。昔から楽観的で、周囲の人からもそう思われていたように感じる。これから外国で知らない人たちと暮らすと言われても、何とかなるだろうと信じて疑わなかった。

ＵＷＣでの生活はそう簡単にはいかなかった。日々の生活の中で、不安、怒り、悲しみといった感情が体の中を駆け巡っては消えていった。気分が頻繁に移り変わることに苛立ちを覚えた頃、ある疑問が自分の中に生じた。

自分って、こんなに弱い人間だったっけ。

思い切って友人に相談すると、弱くたっていいんじゃない？と返された。それまで、そんな考えは全くなかった。自分の弱さを認めないことに必死だった己を恥じ、人の弱さを正面から受け止めてくれる環境の素晴らしさに気が付く契機となった。

多くの人が、自己の脆弱性をさらけ出すことに不安や恐れを感じたことがあると思う。僕はＵＷＣでの経験を通して、弱いところも含んで自分を受け止めてくれる存在の大切さを学んだ。ＵＷＣを卒業した今、そんな友人たちのように、人々を等身大で受け止められる人間になりたいと強く思う。

友人たちと卒業式にて

最後になりますが、この機会を支援してくださったＵＷＣ日本協会の皆様と、未熟な僕を常に支えてくれた家族、友人たちに心より感謝いたします。

UWC ISAK Japan（日本校）

苦労＜＜＜仲間

山本　綾音

「困難があると思いますが、精一杯頑張ります。」そう周りに宣言して始まった日本校での生活は、困難という言葉が薄っぺらく感じてしまうほどに、苦難の連続だった。

友達が何を話しているのか理解できなくて、聞こえていないふりをした。歴史の課題が満足にできなくて、授業をサボった。言語の壁は想定以上に高かった。できないことばかりが目につく中で、みんなはできたことを見つけてくれた。歴史は３だったけど、数学は７取れた。昨日は休んだけど、今日はちゃんと来れた。おかげで次第に英語ができない自分を受け入れて、その中での自分の頑張りを認めてあげられるようになった。

そうして日本校での生活が順風満帆に進んだかと言われるとそうではなかった。新たな気づきを得ては、新たな壁にぶつかる。苦難の連続だったが、いつも日本校の仲間が一緒にいてくれた。深夜遅くまで一緒に考えたり、学校何周も散歩したり。辛い日々はたくさんあったけど、その分たくさんの発見とかけがえのない仲間を得ることができた。

友達とお出かけ

卒業して数ヶ月未だ日本校での生活を恋しく思わない日はない。いつかの再会を楽しみに、日本校で得た大好きな仲間たちに誇れるような人生を送ろうと思う。

◆2025 年度 UWC日本協会の活動◆

2025 年

【５月】

13 日：第 36 回理事会

【６月】

1 日：2025 年度派遣に関するオンライン・オリエンテーション

19 日：第 14 回定時総会

2025 年度派遣生激励会

【７月】

4 日～6 日：卒業生会主催
2025 年度派遣生オリエンテーション・
キャンプ

【９月】

21 日：2026 年度派遣生募集オンライン説明会（157 世帯参加）

【10 月】

21 日：第 37 回臨時理事会

【12 月】

14 日：2026 年度派遣生一次選考（筆記）＜60 名受験＞

2026 年

【２月】

16 日：2026 年度派遣生二次選考（面接・グループディスカッション）
＜35 名受験＞

【３月】

18 日：第 38 回理事会

特別寄稿　～UWC卒業生便り～

➢『日本企業で活きるUWC経験』

鬼柳　修一（カナダ校　1994 年卒）

米国の大学、英国での修士課程取得後日本に戻り、ベンチャー企業、世界銀行東京事務所を経て、2005 年から現三井住友信託銀行勤務。

現在、私は三井住友信託銀行ニューヨーク支店にて、当社の中核でありながら海外では本格展開途上にある資産運用事業の立ち上げに携わっています。日本企業では留学経験者は多くありませんが、海外市場の重要性が高まる中、実は日本企業の方が海外で挑戦する機会に恵まれる場面も少なくありません。

私がＵＷＣで学んだ最も大きなことは、文化や国籍、信条等の違いを超えて、人として誠実に向き合う姿勢こそが信頼の基盤になるという、一見当たり前でいて実践が難しい道理です。

約 300 人規模の当支店では、日本的な丁寧さ・慎重さと米国的な大雑把さ・前向きさが交錯します。相手を「外国人だから」と切り分けるのではなく、背景や考え方を丁寧に共有し、必要であれば議論を尽くす。よく言われる話ですが、議論を戦わせた仲間との関係性は強固であり、アメリカで事業を行う日本企業の在り方として、その積み重ねが組織を強くすると日々実感しています。多様性の中で対話を続ける力はまさにＵＷＣで培われたもの。この経験は、今もそしてこれからも私を支え続ける大切な財産です。

10 代後半の多感な時期にＵＷＣで掛け替えのない時間を過ごせたこと、一卒業生として会員企業、支援者の皆さまに深く御礼申し上げます。

➢「挑戦するための安全地帯」

藤田　真穂（インド校　2013 年卒）

米国 Bucknell 大学卒業後、Deloitte コンサルティングの東京オフィスに入社。タイオフィスに駐在し、東南アジアの企業向けのコンサルティングに従事。現在はロンドンにて、テクノロジー関連業務に従事。

タイ駐在時代心の支えとなった同級生と（一番右が本人）

インドのUWCで過ごした 2 年間は、私にどんな状況でも生きていけるという揺るぎない自信を与えてくれました。

UWC時代に自分の「当たり前」が身をもって崩れた経験が、現在の仕事の原点となっています。既存の枠組みを疑い、粘り強く対話を重ね、柔軟に助け合う。この姿勢こそが、複雑な状況下でも着実に前へ進むための確かな力となっています。

また、タイやロンドンなど、慣れない土地での生活や出張において、世界中に散らばる友人の存在は最大の財産です。常に緊張が伴う海外生活において、UWCという絆だけで深く繋がれるコミュニティの存在は、私が新しい場所へ飛び込み続けるための、かけがえのない心の安全地帯となっています。

◆UWC派遣生の推移◆

（1972 年度～2026 年度）

2026 年6月現在

カレッジ / 年度	イギリス		カナダ		シンガポール		イタリア		アメリカ		香港		ノルウェー		インド		オランダ		コスタリカ		ドイツ		アルメニア		中国		日本		タンザニア		タイ		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
1972～2014	88	120	44	73	13	19	16	35	22	33	11	9	4	6	4	17		3	1			1											519
15	1	3	1	1			1	1	2	1	-	1	-	1	1	1	-	1	1	-	-	1	1	-									19
16	2	2	-	2			1	1	1	1	-	2	-	1	1	1	-	2	1	2	1	-	1	1	1	-								24
17	3	1	-	2			1	1	-	2	1	2	-	1	3	-	-	1	3	1	-	1	1	1	1	1								27
18	2	1	1	1			1	1	1	2	1	1			-	2	-	1	3	-	-	1	1	2	1	1								24
19	-	3	1	1			-	2	1	1	-	2	-	1			1	1	-	2	-	1	1	1	-	2								21
20	2	2	1	1			1	1	1	2	1	1	-	1			1	-			1	-	1	2			-	1						20
21	-	3	-	2			-	2	1	2	-	2	-	1			-	2			-	1					-	1						17
22	1	3	1	1			-	2	1	1	-	2	-	1			1	1			1	-					1	-						17
23	1	2	-	2			1	1	-	2	-	1	-	1			-	2			1	-					-	1						15
24	-	2	-	1			1	1	-	1	-	2	1	-	-	1	-	2			-	1					-	1						14
25	1	-					-	2	1	1	1	-	1	-	-	1	1	1			-	1					-	1	-	1				13
26			-	1			-	2	-	1	-	1	-	1	1	1	-	3			1	-			-	1	-	1	1	-	1	-		16
合計	101	142	49	88	13	19	23	52	31	50	15	26	6	15	10	24	4	20	9	5	5	8	6	7	3	5	1	6	1	1	1			746

◆UWC卒業生の進学実績◆

（2014 年～2025 年にUWCを卒業した派遣生の進路のうち、主なもの）

【海外大学】

●アメリカ

Amherst College, Bates College, Brown University, Colby College, College of the Atlantic, Colorado College, Columbia University, Earlham College, Grinnell College, Johns Hopkins University, Kalamazoo College, Lake Forest College, Leiden University, Lewis & Clark College, Macalester College, McGill University, Methodist University, Middlebury College, Minerva Schools at KGI, Minerva University, New York University, Northwestern University, Oberlin College, Princeton University, San Diego State University, Smith College, St. John's College, St. Lawrence University, St. Olaf College, The University of Oklahoma, UC San Diego, University of Amsterdam, University of California Davis, University of Pennsylvania, University of Richmond, University of Rochester, Wesleyan University, Williams College, Yale University

●イギリス

Aberystwyth University, Imperial College London (ICL), University of Cambridge, University College London (UCL), Wesleyan University

●その他

Amsterdam University College（オランダ）、Bard College Berlin（ドイツ）、Catholic University of Leuven (KU Leuven)（ベルギー）、Delft University of Technology（オランダ）、ESCP Business School（フランス）、IE University（スペイン）、Sciences Po Le Havre Campus（フランス）、The University of New South Wales（オーストラリア）、University of Amsterdam（オランダ）、University of British Columbia（カナダ）、University of Toronto（カナダ）、Politechnika Wrocławska（ポーランド）、Quest University Canada（カナダ）、Yale NUS（シンガポール）、Yale NUS（アラブ首長国連邦）

【国内大学】

大阪大学、岡山大学、京都大学、慶應義塾大学、国際基督教大学、上智大学、筑波大学、東京医科歯科大学（現 東京科学大学）、東京大学、東北大学、早稲田大学

公益社団法人 ユナイテッド･ワールド･カレッジ日本協会

会 員

2026 年 6 月 15 日現在

（敬称略･順不同）

≪法人会員 53 社≫

アサヒグループホールディングス	ソニーグループ	富士電機
旭化成	第一三共	古河機械金属
朝日生命保険	第一ライフグループ	古河電気工業
アステラス製薬	大和証券グループ本社	丸紅
ADEKA	中外製薬	みずほフィナンシャルグループ
安藤･間	東京海上日動火災保険	三井住友海上火災保険
伊藤忠商事	東レ	三井住友フィナンシャルグループ
ANAホールディングス	日清製粉グループ本社	三井物産
NTT	NIPPON EXPRESSホールディングス	三井不動産
王子ホールディングス	日本軽金属ホールディングス	三菱ケミカルグループ
キッコーマン	日本製鉄	三菱重工業
コマツ	日本生命保険	三菱商事
サントリーホールディングス	日本ゼオン	三菱電機
島津製作所	日本郵船	三菱 UFJ フィナンシャル･グループ
清水建設	野村ホールディングス	横浜ゴム
住友化学	東日本旅客鉄道	
住友商事	日立製作所	
住友生命保険	富国生命保険	
積水化学工業	富士通	

≪個人会員2名≫

佐藤 輝英（UWC卒業生）　　島田 和大（UWC 日本卒業生会 会長）

【支援企業･団体（特別寄付）】UWC 日本卒業生会

最近の動向

今年度、中国校への派遣を再開しました。異なる文化を持つ多くの人たちとの交流から相互理解を深め、争いが絶えない時代だからこそ多様性を受け入れられる生徒が増えればと考えています。

日本協会では、一人でも多くの高校生が、UWCにおいて「人生を変える体験」ができるよう、ご支援いただく法人会員や個人の拡大に向けて積極的に活動してまいります。

公益社団法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ日本協会

会　　長: 小　路　明 善（アサヒグループホールディングス 会長）
専務理事: 長谷川　知 子（経団連 専務理事）
事務局長: 長　基　公 則（経団連 教育･自然保護本部主幹）
事 務 局: 〒100－8188 東京都千代田区大手町1－3－2
一般社団法人 日本経済団体連合会 教育･自然保護本部内
電話:03-6741-0163 FAX:03-6741-0351